
HIMMEL -天国から見下ろした空-

ハルカゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H I M M E L - 天国から見下ろした空 -

【Nコード】

N 5 7 1 1 P

【作者名】

ハルカゼ

【あらすじ】

西暦2015年、テレポートもホログラムもまだ開発されていないここ日本では、春を迎えていた。

どこにでもいるような顔の高校生、如月博志は、愉快で騒がしい友人たちの影響もあり、入学からハプニング満載。

そんな中、アメリカで核貯蔵庫や都心が謎の爆撃を受け、米本土の約3分の1が壊滅的被害を受け、その後、国連の調査研究班の同乗していた輸送機が撃墜されてしまう。

世界各地が攻撃を受けるも、戦闘空域のみ電子機器が使用不能状態

に陥る。圧倒的不利で戦うも、次々に占領されていってしまう。

世界中の軍事ネットワークに潜んだコンピュータウイルスが兵器管制を乗っ取ったのが原因だった。

被害はアメリカから始まり、東西へ広がっていく。

日本政府は緊急事態宣言を発動、最新鋭のバトルスーツのパイロットに如月たちはスカウトされる。そこで出会った人は……クラスメート？！

世界の片隅で混乱と殺戮の渦に巻き込まれていく――

硝煙の香りのするほのかに甘酸っぱいライトノベルを、どうぞ。

プロローグ（前書き）

この物語のシナリオ・設定はフィクションであり、
実在する国家及び組織が頻出しますが、
それらを示唆するものではありません。

プロローグ

正義から見た悪、悪としての正義。

この世に絶対的な正義なんて存在するのだろうか――

アメリカの閑かな高原に走る州間高速道路。

早朝の静寂を切り裂いて、地響きに似たエンジン音とけたたましいサイレンが空気を震わす。

銀行強盗の連続犯の乗ったヴェイロン16・4スーパースポーツをアメリカ・州警察のパトカー、シボレー・カブリスPPVが追う。どちらも速さを追及した究極のマシンである。

§

カーチエイスは映画のような生易しいもんじゃない。下手をすれば死へ一直線だ。

大概、奇跡は起きない。元々奇跡なんて信じていない。

スピードメーターを見ると、300km/hをゆうに越えている。しかし、追跡車両は一向に減らない。むしろ増えている気がする。パパパパンツと後部座席から銃声が響く。相棒がパトカーのタイヤを狙って撃っているようだが、向こうもそうやすやすとは撃たせてくれない。

罵声がサイレンに混じって聞こえる。『止まれ！』と言われて止まるヤツなんていないよな、と思う。どうせ今車から降りたって許してはくれないだろう。走り続けるしかないのだ。少しでもスピード

を落とせば、待ち構えているのは地獄のみである。

「マズいな、振り切られる……」

助手席の警部の思いがけない言葉に少なからず動揺してしまう。

ふいにボスツと鈍い音がして最前列を走っていたパトカーが横滑りしながら左へ外れる。左の前輪をパンクさせられたのである。ギリギリのタイミングで躲す。

事実、状況は悪化してきている。道路の封鎖が間に合わなく、一般車両がまだ走っているのだ。一瞬でも気を逸らすとぶつかってしまう。

「どうします、長官」

無線の先は警視庁長官だ。

「……今へりの出勤を要請するところだ」

「早くしないと逃げちまいます！」

「……わかっている、できるだけ早く——」

——その時だった。一瞬で事態が急転した。

「そろそろじゃないか？」と後部座席から声がする。

一般車両を避けるのに精一杯だったが、バックミラーをチラリと見ると、渋い顔をした警察官が無線で話していた。よし、これなら逃げ切れるかも知れない。

しばらくすると、開けた直線道路に入った。一気に加速しようと、アクセルに足を添えた時——

ツツツドンッ！！！！！

——轟音とともに視界が急に広くなった。

声を上げる暇も無かった。思考より先に体が硬直する。フロントグリルが吹き飛び、エンジンが根こそぎ無くなる。片端の無くなったクランクシャフトが路面に接触して細かい火花を散らす。衝撃で車がスリップして、慣性で数回横回転して完全に静止する。その周りを次々にパトカーが取り囲む。僅か10秒余りの出来事だった――

§

数分前、とあるマンションの空き部屋の窓際には一人の青年がいた。普段は人気^{ひといけ}の無い寒々とした部屋に、乾いた風が吹き込み、白い力ーテンを揺する。

手には対物ライフル、バレットM82A3。弾丸は徹甲炸裂焼夷弾HEIAPの一種のRaufoss Mk 211。弾丸の全長は14cm近くあり、マガジンはまるで大きな辞書のようなものである。

「ターゲット座標、α35・δ63、風速は北東に10メートル毎秒――」

無線からの情報に合わせて、チキチキと目盛りを回す。スコープを覗き込むと、2km程先の高速道路が視界いっぱいに広がる。息を止めると、スツと心臓の鼓動が小さくなる。凜と空気が張り詰める。

「目標、急速接近！」

トリガーのスプリングが軋む。遠くから複数のサイレンが聞こえる。カチツと引き金を引くと、ドウツという轟音と共に硝煙が広がる。853m/sで飛び出した弾丸は右回りに回転しながら、一直線に進む。

タングステンの弾芯によって、直角に進んできた車のボンネットに深々と突き刺さる。ジルコニウム粉末が高性能爆薬を起爆させ、エンジンもろとも吹き飛ばす。

時速300km以上で走る車のボンネットのみを、たった1発で破

壊した青年の狙撃技術には、感服せざるを得ない。

青年はジャキッ、と金属質に光る銃を握りしめて、日本語で呟いた。

「——クソツタレが……」

第一章

春の朝日がカーテン越しに部屋いっぱいに満ちる。

鳥の声で起きる……なんて贅沢な物はなく、向かいのゴミ集積場にたかるカラスぐらいだ。

ほのぼのとした空気に反して残酷なケータイのアラームが部屋中に鳴り響く。

「んん……」

俺、こと如月博志は手探りでボタンを操作する。

（うああ……寝起き悪ウ……）

俺は朝は一年中苦手だ。別に低血圧とかいう訳ではない。

主な原因はゲームだと自覚している。まあ、ゲームは結構得意な方だ。親友と無双プレイ動画をインターネットにアップして遊んでいた時期もあった。

……それでも一応、容姿は気にする方だ。が、中学校時代は周囲からオタク扱いされ、全くモテなく、恋愛経験は皆無だ。

（でも、それも昨日まで……）

そう、今日は入学式、今日から高校生！

§

……き、……緊張する……初めての人はっかなんスけど……！

入学式では、高校生活最初にして最大の難関の校長先生の話をとにかく寝ずにクリアして、今は朝のSHRが終わった休み時間。他の人たちも同じような感じかと思いきや、知り合いが同じクラスの人とは結構盛り上がってるようだ。

「如月君、だっけ？」

ふいに隣の席から声がかけられた。

「……これから、よろしくねっ！」

「……か、かわええ……！」

「あ、うん、こつちこそ」

名簿を見ると、篠原咲季（はなぶさ）と書いてある。

腰のあたりまで伸びた髪と整った顔がなかなかの可愛いさだ。『実はモデルだ』と言われても誰も疑わないだろう。

「『博志』、か……ね、ヒロって呼んでいい？」

「ん？あ、ああ……」

恋愛経験ゼロの俺が目の中の美少女にぼーっと見惚れていると突然、背後に殺気を感じた。

「きいさアアアアぎいいい！？　なアにイチャイチャしてんだあアン！？」

「って、お前かよ！」

と、いきなり篠原さんの前に立って、

「俺は小林純（こばやし）。コイツの親友なんだ、ヨロシクう」

根っからのオタクのコイツは、『3次元には興味ない』とか言いながら、美少女には目がない。

「って、篠原さんおもしろいって引いてるだろオが」

見るからに顔が引きつっている。と、

「お、なんか賑やかだねエ、入学早々から逆ナンですかア？」

「バ、バカっ、そんなんじゃないわよっ！」

親しげに話しかける女の子に篠原さんは真っ赤な顔をして反論する。ふいに、小林が大声をあげた。

「ってあれ！？　水嶋！？」

「って、おい、小林じゃん！久しぶりイ！」

急すぎる展開についていけない俺に、

「ああ、ゴメンゴメン、あたしは咲季とおんなじクラスだった水嶋（みずしま）愛。
愛。」

ちなみに小林とは一緒の小学校だったんだ」

「へえ、そーなんだ。これからヨロシクな」

この元気な女の子もかなりの美少女。身長は篠原さんより少し高いぐらいか。

ツインテールの長髪が特徴的だ。

銀色のサッシに切り取られた外の風景は、くらくらするほど光に満ちていた。

少しでも太陽にあたろうとする若葉の緑とずっと見ていると吸い込まれてしまいそうな空の青が頭の中で混ざりそうになる。

最近、校舎を建て替えたらしく、学校の雰囲気はキレイな感じだ。ここ、県立海陽高校は名前のとおり海の近くにあり、環境がいいと人気の高校だ。

（まあ、近くと言ってもすぐ隣なわけでもなく、5階の窓から遠くに見える程度なんだがな……）

こうして俺の波瀾万丈の高校生活が始まった。

§

「はあ、疲れた……」

今日は実をいうと早く家に帰りたかった。父さんから入学祝いのeメールが来るからだ。俺の父さんはアメリカでコンピュータ関連の仕事をしているらしい。らしい、というのは、年に数回、eメールでやりとりするだけだからだ。俺が物心ついた頃にはもういなかったから、もちろん、顔など覚えているわけではない。

「ただいま」と部屋に入り、早速パソコンをチェックしてみる。

「お、来てる！」

『入学おめでとう。』から始まるメール。この向こう側に父さんがいると思うと、いつも涙がこぼれそうになる。

ニューヨーク市街の夜景の写真が添付されていた。オフィスから撮ったものだろうか。夜空に浮かぶ幾億もの恒星をかき消して、それぞれの照明が存在を主張している。その一つひとつの灯りの下に、またいろいろな人が集っている。

返信画面に切り替える。

『ありがとう。こっちは元気です。もちろん母さんも。』
さすがにこれだけは寂しいか、と思つて、数行書く。

『そういえば、この前皆既日食の時に撮った写真を送るよ』
一週間前、約300年ぶりに日本で皆既日食が観測された。本当に自分は運が良かったと思う。

『送信』をクリックする。初日は緊張でムダに疲れちまったなあ、と長い溜め息をつく。

あー、宿題やんなきゃ……、と机に向かうが、なかなかやる気が出ない。

(やろうと思うからやる気が出ないんだ。ということ……)
ドカッとベッドに倒れこむ。ボーツと宙を眺める。

(……………)
そうしているうちに、いつの間にか眠ってしまった…

8

アメリカ東部、アパラチア山脈の中腹の地下、500mに位置する旧戦術核兵器廃棄倉庫。ここには、今では使われなくなったガンバレル型ウラン濃縮原子爆弾が大量に保管されている。

ガンバレル型は、構造は簡単だが、反応効率が悪く、不安定で扱いにくいので最近では使われていない。

地下500mまで届くバンカーバスターなど存在しない、という常識に基づき、保管されているが、監視カメラが設置されているだけで、今はもうここには誰もいない。

だが、そこに向かう第6世代最新鋭ステルスの超音速戦闘機がいた。この機体は前世代の傑作機F-22の性能をはるかに越える。まだ実験機の段階なので機種名はついていない。

しかし、この機体だけには本来、ミサイルランチャーがあるはずのところ巨大な砲台が2つ、不釣り合いについている。高指向性衝撃波榴弾砲と呼ばれる高度戦^{HSDI}略防衛構想での非核広範囲攻撃兵器の一つ。名前のとおり、特殊な高性能炸薬を超音速で爆破することにより強力な衝撃波が発生し、無数の鉄球と共にそれを目標に向け甚大な被害を与えるものだ。コンピュータシミュレーション技術の発達の賜物とも言えるだろう。

核兵器ほどの威力はないものの、地下にある核シェルターや弾薬庫などを攻撃する目的で開発された最新鋭の兵器である。

戦闘機は2000KPHをゆうに越す速度で一直線に目標へ進む。
発射カウントダウンが無線から聞こえる。

5.....4.....3.....2.....1.....撃て！
Open Fire!

射程距離は約3000m。2100KPHで突入する、とすると目標上空通過まで5秒強だ。発射ボタンをすかさず押す。事前に入力してある座標に向かって右翼の砲台が轟音を響かせる。迫撃砲のような直線的な弾道を空に描いて飛んでいく。

目標との距離、50m。近接信管が作動し、炸薬に電気信号を送る。忠実に爆発した炸薬は超音速で炸裂し、爆風はシミュレーションどおり最適^{うが}な共振で弾頭の先から照射された。

鋼鉄をもうち穿^{うが}つ透明な刃は鉄球の咆哮と共に誤差10cm以内に着弾し、一気に地下500mに達した。地盤全体からするとほんの小さな衝撃だが、眠っていた信管を起動させるのには充分だった。

一瞬で臨界点に達し、周りの大量の核兵器を巻き込み、大爆発を起こす。

10メガトンの核爆発。半径2000mは火球に飲み込まれ、半径10000mは熱線により灼熱地獄になり、半径50000mは爆風によって一瞬にして破壊された。

それだけではない。風に乗った死の灰は成層圏まで舞い上がり、都市部に向かっていった。

ゆっくりと、しかし確実に、まるで迫りくる死神のように――

§

バスを降りると、そこは喧騒に満ちていた。

車のエンジン音、クラクション、人々の話し声――

しかし、いつもは気になるそれらも、今はあまり耳に入ってこなかった。緊張で手汗をかいているのがわかる。これは普通の任務とは全く違う。なにしろ報酬が10倍以上だ。

（司令部が何をしたいのなんて知ったこっちゃねーが……）

歩道は行き交う歩行者で溢れている。これならすれ違う人の顔なんて覚えていないだろう。

スマートフォンを取り出す。しかし、中身はただのスマートフォンではない。携帯電話回線ではなく、あえて無線LANのサーチをかける。と、すぐに目当ての無線LANのルーターがヒットした。

――米軍の軍事ネットワークの最下端。

すぐにアプリケーションを起動させる。WEPキーのクラッキングソフトだ。

街灯に寄りかかって待つこと数十秒、間の抜けた音がして解析結果

が表示される。文字列をコピーして認証パスワードに入力すると、簡単に侵入できた。

もう一つのアプリケーションも立ち上げる。64GB中61GBもメモリを使用している。ただ重いのは中身だけで、起動は速い。5日前、司令部から渡されたこのスマートフォンには音楽もビデオも無く、ただこのアプリケーションが2つあるだけであつた。

（おそらく、このアプリケーションは俺のあずかり知らない誰かさんが作つたんだろうな……）

デザイン性は皆無で、ただ『Enter』と書かれたボタンだけ。それを指先で軽くタップする。

サーツと黒地に緑色の字が目にも留まらぬ速さで流れていく。その時、無線LANには大量のデータが送信されていた。一つ一つでは全く意味を持たない文字が、文字列となつてほぼ光速で広まっていた。

ネットワーク上にある全ての端末に自らのコピーを置いていき、そこでじつと待つ。

タイムアウト

時間開放性の『トロイの木馬』型のコンピュータウイルス。

指定された時間までプログラムの中に潜み、時間になるとそこから一気にコンピュータに攻撃をかける。

大規模な混乱を起こすにはぴったりだ。

画面にはデータ転送量と所要残り時間が表示されていた。

百分の一秒の所がめまぐるしく変わっていく。

辛抱強く待っていると、『ピッ』という音とともに残り時間が0：00：00になる。

残った任務はその場から立ち去るだけだつた。

道路を渡ると、タイミングよく帰りのバスが来た。

（こんなことも計算に入っていたのか）

深く座席に腰掛け、大きく深呼吸をする。

ドアが閉まると、喧騒も少しはマシになった。

周りを見回す。おしゃべりをする女子高生、つり革につかまっているサラリーマン。

急に普通の青年に戻った自分が高んだか皮肉に思えて、思わず窓の外を向いて微笑んでしまった……――

第二章

(——さら——きさら……！)

——……ん？

「おい！如月！」

「は、はいっ！」

とつさにいかにも起きていたような顔をする。

「57ページの問2だ」

「はい、えつと……」

いつの間にか外ではうるさく蝉が鳴いている。もう7月だ。あれから、特に変わった事件もない。いたって平和な日常だ。

いつものことながら、休み時間になると純が寄ってきた。

「いやあ、流石に30度越えるとキツイわ……」

暑い。今年の夏も酷暑らしい。みんなうちわでパタパタしながらぐでーっとしている。

「どっかに涼みに行きたいなあ……」

「……コンビニとかファミレスとか？」

「そうだ、映画行こうぜ！海袁！」

「おお、いいねえ」

今年最高の感動作、『海袁 - The Last Massage マッサージ

-』は、今話題のシリーズ映画の最終章だ。なんでも、海上保安官がなんだか知らんが急に按摩あんまを志す、という話らしい。

今週は成績処理でか何だかで午前中だけの日課で、みんな午後はフリーだ。

「んじゃあ、愛たちも誘うか」

「ああ、そうだな」

すると、

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！」

愛だ。相変わらずテンションが高い。

「いや、ギリギリ呼んでねーし」

「気にしない！んで、何話してたの？」

「いや、みんなで映画見に行くか的な話。『海袁』。」

「行く！行きます！咲季は？」

「あ、あたしも行く！」

「よーし、……ってやべえ、学生証どこやったかな……」

「つて、なくすなよ……」

そんなこんなで放課後、急遽映画に行く事になった。

§

「おつす！」

念のため集合時間の10分前に着いた俺が見つけたのは私服姿の咲季だった。

水色を基調とした服がとても爽やかだ。

「はえーな、みんなは？」

「まだみたい……あたしも今来たところ。」

「そ、そっか」

……。
会話が續かない……。！……。っーかハズくて直視できない……

「あ、あのさ、ヒロは中学の時、何部だったの？」

「え、俺？卓球部。なんかムダに運動神経良くてさ。まあその分勉強すれば良かったかなあ……。なんて？」

「そ、そっか……」

……。なんか気まずい雰囲気になっちゃったんですけど……。！俺変な事喋った？

「……。あ、ちょっと待ってて！」

突然咲季が走りだした。向かう先はコンビニ。

しばらくすると、小走りに帰って来た。

「バニラとチョコ、どっちがいい？」

どうやらアイスを買ってきてくれたらしい。

「んじゃあチョコで」

「はいっ」

小さく放物線を描いて手のひらに収まる。

「わりいな、いただきます！」

「どーぞどーぞ」

つてコレ、普通立場が逆だよな……奢らせちゃったし。あ、ウマイ。ふと横を見ると、咲季がチョコアイスをじっと見ている。

「ん？」味見だろうか。俺が差し出すと、

「……な、なんでもないっ……！」

咲季は顔を真っ赤にしながら首を縦に振ったり横に振ったりしている。どっちやねん。

それから十分後、無事に合流した俺達は……

「ヤダヤダあ！ポップコーンはキャラメル味がいいの！」

「子供かつ！」

小学校時代に流行った芸人を真似て純に全力でツッコむ。

その横では、

「ったく純は……」

そう言いながらキャラメル味のポップコーンを買った愛。

「ってオイー！」

そんなこんなで小学生に白い目で見られながら席についた。

§

内容は題名のとおり、海上保安庁の救難隊を舞台にした作品だった。いやあ、まさかあそこで主人公が××××××とは……

「いやあ、俺もいつか、何かのために命を懸けて戦う男になってみたいもんだな」

ふと俺が呟くと、

「んな都合のいいヤツなんていねーだろ、だいたい、ストーリーが出来すぎなんだよ」

純が大きな欠伸をしてサラツと受け流す。

横を見ると、愛はグッズを買って上機嫌だ。ここら、人通りの多い所でスキップするな、危ないだろ。

咲季は赤い目をしていた。……もしかして泣いてる？

……あ、目が合った。と、真っ赤な顔をしてそっぽを向かれた。苦笑いしつつ歩く。

ふと街角のビル的大型液晶ディスプレイに目をやると、

アメリカで原子力発電所の放射能除去作業中に建物が崩落し、作業員16人が全員死亡した、とのニュースが流れていた。そういえば、そんな事件もあったなあ……

9・11の惨禍を忘れつつあったアメリカ国民にとって、非常に大きな打撃だったに違いない。メディアは“偶発的事故”として報道した。しかし、犯行声明が未だに出されておらず、過激派も容疑を否認していることから、原因の究明は難航しているらしい。

当時のアメリカは、政治、経済ともに壊滅的被害を受け、世界中が大パニックに陥り、米ドルは大暴落、アメリカ産の製品も価格が高騰した。既に死者は50万人を超すと言われ、100年後には1000万人が死亡する、とまで噂された時期もあった。

思えばもう3ヶ月も経ったんだなあ……――

「おいヒロ、おいてくぞ？」

「あ、わりいわりい」

陽炎のゆらめく街の喧騒は

風の無い真夏日の午後の太陽に飲み込まれていった――

§

轟音を立ててF-22ラプターの編隊が次々に着陸していき、絶え間なく滑走路からエプロンに誘導されている。
アメリカ西海岸の空軍基地。

「訓練、ご苦労だった。ハンガーに入り次第休憩してくれ」
一斉通信のスイッチを切り、

（そろそろ俺も休むか……）そう思ってコンソールを閉じた矢先、
「中佐！」

航空迷彩のジャケットを着たままパイロットが走って来た。期待の新人空兵だ。

「今日の俺、どうでした？」

「まあ、いつもよりは良かったんじゃないか？」

そう答えると、あからさまに嬉しそうな顔をする。

「だが、まだ左ロールからの切り返しがいまいち遅れるなあ」

「……はい」

「明後日からは自衛隊と合同訓練だ、ゆっくり休め」

「ありがとうございます」

走って帰って行く後ろ姿を見て、自分の入隊したての頃を思い出す。
猛訓練、他愛もないおしゃべり、それから、殉死していった仲間たち――

『ち、中佐！』

突然の通信に我に帰る。

『緊急事態です、無人機が……！』

「どうした？！」

『一斉にコンピュータが起動したと思ったらいきなりアフターバーナー全開で離陸して……』

「給油中ではなかったのか?!」

『全機完了と同時に………』

窓の外を見ると、まるで1匹の巨大な竜が天に昇るかのように戦闘機や空中給油機などが発進していく。

『それから電子機器関連は完全に使用不能、レーダーや無線も使用物になりません……!あの最新鋭ジャミング早期警戒管制機も……』

「馬鹿野郎、1機2500ドル以上する戦闘機たちだぞ!?どうにか止められないのか!」

『……………』

完璧な緊急発進で次々に離陸していく。

上空で綺麗な編隊を組んだ無人機の大編隊は、無情に主翼をきらめかせ東に向かって飛んでいった――

S

黒い色紙にラメをちりばめたかのような。

煌めくニューヨークの街並みを目指して、漆黒の空をA-10をはじめとする対地攻撃機の編隊が巡行速度で滑るように飛行している。

その上空には一風変わった外見の航空機が飛んでいた。早期警戒管制機^{AWACS}。しかし、このAWACSはただの管制機ではなかった。電波

妨害プログラムが組み込まれた軽量型量子コンピュータが搭載された超高性能電子戦機だ。これは高出力のノイズ電波を広範囲にわた

って照射する事によって、レーダーなどの無線通信設備を攪乱させ、また、ミサイルなどの誘導兵器の誘導電波などを妨害して無力化する電子戦支援機である。

アメリカ海軍の電子戦機EA-18Gグラウラーなどが現役機だが、パルス圧縮や周波数変更などによりジャミング対策をとられがちだ。

しかし、この爆撃機がベースの電子戦支援機に量子コンピュータが搭載された事により、従来に比べ、敵通信周波数のサーチが格段と早くなり、また、ドップラー効果を細かく計算する事で主に地表に向けてより広範囲をジャミングすることが可能になっている。

無人のコックピットで虚しく輝くディスプレイに、大きく表示される『AUTO PILOT』の文字。

ジャイロ航行装置やGPSの情報に地表レーダーの補正が加わる。あらかじめ設定された座標に到達すると、ジャミングを開始した。有効範囲は機体から半径300mの球と伏角30度以上の円錐形。そこに入った電子機器は一切使用不可能である。

§

『迎撃隊、全機出撃！』

ホットスクランブル
緊急発進の命令が出たのは30分前だ。
ワシントンD.C.上空、2000m。

幾千の星が煌めき、細い三日月が弱々しく輝いている。夜間の空襲は、大戦中は目視のため非常に高い技術を要したが、電子化された今は全天候での攻撃可能機が一般である。しかしそれは迎撃機も全天候に対応できる機体が配備されることを意味している。今乗っているF-16もその一つだ。ファイティング・ファルコン兵装はM61A1 20mmバルカン砲、AIM-120中距離空対空ミサイル、AIM-9短距離空対空ミサイル。AMRAAM
SR-AM

『敵爆撃機はかなりの兵装だと予想される。爆撃を開始する前に撃

……』

ブツツと不意に無線が途絶え、雑音だけになる。

「!? おいおい、マジかよ……」

僚機にも全く繋がらない。とともにヘッドアップディスプレイの表

示が全て消えていることに気付く。

「まさか……ジャミング……？」

あわてて機内を見渡す。正常に稼働しているのはアナログ式の高度計と速度計だけだ。

「クソッ、マジかよ……」

機体を照らすのは高層雲の隙間に浮かぶ月明かりと星の瞬きのみ。これでは戦闘はおるか、敵機の識別さえできない。眼下の街並みを見て毒づく。

不意に視界の端に一筋の閃光がはしる。ハッと我に帰って回避行動をとる。

（攻撃されてる……どこからだ?!）

下に回り込んで上を見上げる。と、おぼろげな月を隠す高層雲に黒く小さなシルエットが映る。

「あいつかつ……！」

直線翼に近い後退角の小さな主翼が特徴的な戦闘攻撃機、スーパーホーネット F/A-18E。

ジャミング状況下では、ミサイルや自動機銃照準などは使えない。頼れるのは自分の目と勘だけだ。操縦桿を握る手に力が入る。

ビビビビッと敵機の機銃弾が主翼の先を掠める。いや、数発着弾したかもしれない。

ふと気付くと下方にオレンジの火球が広がり、一瞬おいて腹の底に響く重低音が空気を震わす。爆発に照らされた尾翼の破片のマークが自分たちの隊のものだと気付くにはそれほど時間はかからなかった。

「くそっ……！」

戦闘機のドッグファイトはいかに相手の背後を取るかが勝負だ。

グッと操縦桿を引き、180度上方にループ、次いで横に180度ロール。インメルマンターンだ。敵機の後方につく。スロットルを上げるとみるみるうちに追い付く。

「もらったア！」

新型のPGU-28半徹甲焼夷榴弾を装填したガトリングがブオオオツと火を吹く。

しかし、弾は1発も当たらなかった。目の前の機体は急速に速度を落としてバンクしながらフツと横に滑る。

「フォワードスリップ…?!」

減速しきれず、敵機にシュートアウトされてしまう。慌てて回避するも絶対的な隙を与えてしまった。数百発の機銃弾と2発のミサイル。

考えるより先に体が動いていた。ミサイルの進路から機体を逸らす。しかし、2発のミサイルは忠実に追ってくる。

「追尾……されてる……?!」

体にかかるGに耐えるのに精一杯だ。左を見ると、ミサイルの1発がアクティブになったようだ。ブースターで一気に迫ってくる。接触直前に右に避ける。ジャミングでミサイル追尾警告の鳴らない機内にシューウーと不気味な音を残して追い抜いていく。あとはもう1発だ。一度スピードをつけようと急降下する。しかしそこに機銃の雨が追う。ビスビスビスと着弾の音がする。

「ヤバいッ……！」

幸い、そんなに大きな損壊は無かったようだ。

しかし、ミサイルを見失ってしまった。目視で確認しようと見渡すが、どこにも見当たらない。

あるとすれば、直接視認できない所、つまりは機体の真後ろ……！

ドオオオオンッ！という爆発音と大きく揺れる機体。

咄嗟に判断し、緊急脱出装置のレバーを引き、イジェクトする。座席がロケットモーターによって射出される。

足の間に爆発する機体が見えた。燃料に引火したのだろう。黒煙をあげて墜ちていく機体の残骸を黙って見ていることしかできなかった。

た。

パラシュートが開く。スピンしないように姿勢を正す。

先程のミサイルを思う、と同時に最近流れていた部隊内の噂を思い出す。同期のパイロットから聞いたものだ。

『新バージョンのジャミングAWACSは敵軍の電子機器だけ使用不能にするらしい……』

（そんなまさか、自軍の戦闘機にやられたってのかよ……！）

眼下を見下ろす。目に映った景色はまさに地獄絵図だった。街が赤々と燃え、今もあちらこちらで火柱があがる。

「た、対空機銃は……？ 地対空誘導ミサイル部隊は……？」
パイロット

辺りを見回しても、反撃の砲火は見当たらない。

『全滅』という二文字が頭をよぎる。

「そんな……」

続く言葉が無かった。

相手は、ミサイルのロックオンが可能なら、精密爆撃も可能であろう。

兵器工場に当たったのか、一際大きな火柱と轟音が鼓膜を震わす。これが夢であってほしいと願った。自分の非力さを痛いほど感じて、固く目をつぶった――

第三章

夕風とはこの事だろうか、風は無く、昼間に30 以上に熱せられた空気が放熱しきるのにはまだだいぶ時間がかかりそうだ。こんな時間帯は家でゴロゴロしているのが一番良い。傍らにポテチがあるとなお良い。

徒然草の清少納言的な心情の夏休み初日の夕方、テレビのバラエティー番組をリビングのソファからぼんやり眺めていた。司会者と芸能人が数人いて、ゲストの俳優の衝撃告白を笑う、という至って普通の人気番組だ。

冷房で乾いた喉を麦茶が潤す。

体重をソファに預けて、サクラの笑う声をぼんやり聞いていると、眠くなってくる。

と、突然電子音とともに急に臨時ニュースに切り替わった。

「——『アメリカで大規模軍事テロ発生』？ また物騒だわねえ」

夕飯の支度をしながら母さんが他人事のように呟く。

「あー、そーだなー……」

生返事を返してテレビを見る。

画面は米空軍の基地を映している。戦闘機、爆撃機、輸送機など様々な軍用機が飛び立っていく。

見ている中でも数十機が去っていく。まるで一つの意思を持った軍隊だ。

変わってホワイトハウスの会見が映される。カメラのフラッシュがすごい。

大統領は鬼気迫った表情で話している。途中で何回も耳打ちが交わ

される。

「どうやらアメリカ政府は各国に非常事態宣言を勧告したようだ。

——それは平和な日常が終わる予兆でしかなかった。」

何十分、いや、何時間見ていただろうか。

「部屋で2ちゃ。ねるでも見よっかなあ……と部屋に戻ろうとした時、母さんに止められた。」

「アンタ、いつまでゴロゴロしてんの？ 夏休みの宿題は？」

「うっさいなあ、別にいいだろ？ 後半になってからで」

「毎年そう言って最終日に徹夜してるじゃない」

——うっさい……

自分の部屋に戻ろうと階段を上るとインターホンがなった。

「はい」

ガチャツとドアが開いた瞬間、殺気が辺りに満ちた。

母さんの上段回し蹴りがお客様の側頭部に炸裂する……

かと思ったら、客は右手で野球のバントの要領で衝撃を吸収していた。俺の冷や汗を返せ！

「って、父さん！？」

「帰ってくるなら電話ぐらいしなさいよ！」

「いやあ、こうサプライズ的な感じで」

——サプライズじゃねーよ！

「全く……てつきりどつかでノタレ死んでると思ってたわ……」

——って、どんな夫婦だよ！

「……博志、」

「なんだよ、急に」

「日本防衛を、やらないか」

「……………は？」

S

トンネル内の暗闇に黄色いナトリウムランプが次々と後ろに流れていく。

「つて、ここどこ！？」

「^{ヒンメル}HIMMEL。」

端的かつ冷淡に響く。ハツとして運転席の父さんを見ると、袖に銃と盾の描かれたエンブレムがついている。

「な、何？ 何なんだよ…………？」

「一第四軍隊《the Fourth Force》つて聞いたことないか？ 日本国陸上・海上・航空自衛隊に次ぐ第4の事実上戦力。災害援助などは一切せず、自国防衛のための戦闘を唯一の目的とした組織。最新の兵器と少数精鋭の戦闘員を集めた最強の秘密部隊。主に空からの攻撃に特化している」
流れるように父さんの口から言葉が出てくる。

……………軍隊？ でもなぜ父さんが…………？

ふと気が付くとさつきから長い左カーブが続いている。

どうやら螺旋状になっているようだ。ボーッとしているとずっと直進しているかのように感じる。

「ここは元は放射性廃棄物の地層処分予定地だった。でも、工事の途中で市長がリコールされて、計画は破棄。残った地下掘削跡を改装したのがHIMMEL。まあ、地下200mにある南北約3kmの要塞つてとこだな…………」

車を停めて、建物内に入る。艶消しホワイトの壁とグレーの現代的

なデザインの照明。

近未来SF映画のワンシーンを思い出す。
拘束されてないだけマシってか……

どのくらい歩いただろうか。1つの部屋の前で立ち止まる。
と、シュツと自動ドアが開いた。

いくつものモニターや電子機器に囲まれて、一人の初老の人が座っていた。

「うむ、よく来たな、君が如月博志君だな。さあ、入ってくれ」
威厳を感じさせられるよく通る低い声。

「篤志君からいろいろとデータはもらっていたが、君ほど適合した人材はいないと言っても過言ではない。なにしろ最年少大尉の実の息子だからな」

そう言われて振り返ると、いつの間にか父さんの姿は無かった。

「私は海神雲雀^{わたつみ ひばり}だ。少将を務めている。以後宜しく。」

———
なんだか威厳がそのまんま名前になったようだ。

「さて、本題に入ろうか。君も知つてのとおり、この大規模軍事テロに対し、アメリカ政府は非常事態宣言を出した。この脅威は最早世界規模に広がる可能性は少ないとは到底言えない。日本本土が攻撃されるのも時間の問題だろう。」

そこで、政府の秘密裏に開発されていたOMEGA^{オメガ}と呼ばれるバトルスーツに搭乗してほしい。私達には君が必要なのだよ。……手伝ってくれるかね？」

「ち、ちよつと待つてください！俺は戦争に巻き込まれるんですか？！」

「心配するな、一時的に従隊して訓練を受けてもらうだけだ。もちろん、外出も許可されている。緊急時に召集されるだけだ」

「いや、しかし……」

「吉岡上等兵、案内を頼む」

すると、自動ドアが開き、同年代ぐらいの少年が入って来た。

「上等兵、よろしく頼むぞ」

「了解しました。——こっちだ」

少年が手招きしている。

大佐に一礼して部屋を出ると、上等兵と呼ばれていた少年が心配そうに話しかけてきた。

「大佐、怖いよな〜？」

「……へ？」

「あの人、怒るとヤバいらしいぞ……ウワサだと、片手で相手の拳を潰せるらしいぜ！」

——そ、そうなんだ……

「おっと、俺は吉岡^{よしおか}悠真^{ゆうま}。一応上等兵やってる。そっちは？」

「ああ、如月博志です、よろしく……」

「んな堅苦しいのは抜きだぜ？……確か同い年だろ？まあ、俺の方が誕生日早いからセンパイなんだけどな！」

「お、おう……」

「んじゃ、とりあえず案内頼まれたから、個人寮と食堂と、——

——あとは格納庫^{ハンガー}だな、まずはハンガーだ」

「あ、ああ……」

「説明は歩きながらするから。ほら、行くぞ？」

「ち、ちよつと！ああっ——！」

§

長いエレベーターと何重もの生体認証を通り、着いた所はやや小さな扉がついた部屋だった。

「さあ、手のひらをそこに」

言われて、手の形にへこんだパネルに手を当てると、

<ピピツ>と音がして重い扉が左右にスライドしていく。

一歩踏み出すと、そこには見上げるほど高い天井と、壁一面に張りめぐらされた配管。

そして空間の中央に、浅葱色をした人の形に似た機械があつた。

「これがお前専用の機体だ」

「す、すげえ……」

「高さ40m、全重量約100t！最先端技術の結晶だ！」

その巨体は、ハロゲンランプの強烈な照明に照らされて、金属の表面を後光のように輝かせていた。

大きい。そんな言葉しか出てこない。

目の前の巨体の迫力に圧倒されて、声を出す事も忘れて、ただただ見上げていた。

ふと見ると、右手にこれまた巨大な銃を握っている。

「ああ、あれは標準装備のアサルトライフル。弾薬は5・56mm

NATO弾を模した形の装弾筒付翼安定徹甲弾を使用、弾丸径は

113・8mm、全長1148・0mm、薬莖だけでも894・0

mm！デカい！侵徹体は、日本では劣化ウラン合金の反対派が強く

て、タングステン合金が使われてる。侵徹力は距離2000mだと

均質圧延装甲換算で約500mmだつてさ」

なにやら悠真が興奮してうるさいが、気にしないでおく。

「——おい、聞いてんのか？」

悠真に肩を揺すられて、ようやく我に返った。

「ったく、せっかく人が説明してやってんのに……」

——説明が細かすぎなんだよ！

「まあいいや、あとは教官が教えてくれるだろ。あ、お前の機体番号は0-0075だからな、間違えんなよ？」

「はいはい」

「んじゃ、次は食堂だな！」

「え、ちよつと休ませてくれよ——！」

§

一通り施設を見学して、最後に自室に案内される途中。

「うゝ、もう歩き疲れた……」

「そんなんじゃすぐに除隊だぞ？」

「いや、俺は自ら希望して入ったわけじゃないから……」

「そつかあ、このご時世、なかなか入ってくる人少ないけど、ムリヤリだったんだ」

「んまあ、とりあえず夏休みだけっていう契約だからね……」

「いやあ、絶対帰る時は寂しくなるって」

そんな会話をしながら廊下を歩いていくと

「悠真、どこに行ってたかと思ったら、新兵の案内？ つくづくアンタもお人よしねえ」

聞き慣れた声がした。

「——咲季！？」

「はじめまして、そして久しぶり、同じく上等兵、篠原咲季よ」

§

2015年7月15日、国連の決議に基づくテロ対策を援助するために、アメリカ某空軍基地から輸送機とその護衛機が発進する。90人乗りの輸送機の約半分を物資などが占めていた。

大西洋海上上空に達した時、護衛機から突然無線が入った。

『?! 高速接近する機影3を確認! 方位230、距離7000、速度2400!』

「に、2400!?!」

緊張がはしる。こちらの護衛は2機しかない。

『敵機、急速接近!』

無線で未確認機に警告するが、指示に従うどころか応答すら無い。

『交戦許可を!』

「了解した、射程に入り次第、即時戦闘行動に移れ」

編隊を組んでいた戦闘機が鋭いジェットエンジンの音を響かせて飛び去っていく。

彼我の距離は3000m。互いの戦闘機から赤外線誘導ミサイルが次々に発射される。計数十発のミサイルの白煙で満たされた空間を高熱の機銃弾が切り裂く。

バレルロールでなんとか切り抜けた護衛機の後ろには既に敵機が張りついていていた。

「くそっ……!」

^{ストール}失速を利用した急旋回でミサイルのロックオンを外す。命拾いした

……と思った瞬間、背後で爆発音がする。目標を失ったミサイルがもう一機の護衛機に当たったのだ。まるで、“そこまで計算のうちに入っていた”かのように。

さすがに1対3では分が悪い。2機に挟み撃ちにされた。

赤外線欺瞞金属片を散布しながら急旋回する。体にかかるGがキツイ。追ってきていたミサイルがチャフで爆発する。ホッとした刹那、目を見張った。真正面に敵機。

しかし、思いがけない光景が目の前に現れた。コックピットには誰もいなかったのだ。

「——ッなっ……!?!」

なすすべもなく、4発のミサイルと数百発の機銃弾を受け、緊急脱

出する間も無く燃料に引火した。

俺ンジ色の火球が黒煙とともに墜ちていき、空中で爆発する。

「む、無人機だと!? —— お、おい、応答せよ!」

輸送機には戦闘兵装は全く無い。護衛あつての輸送なのだ。

護衛機がいなくなり、戦闘機の恰好の獲物となった。多少頑丈に出来ている機体もミサイルの直撃弾にはかなわない。輸送機は攻撃を主翼と機体に食らい、地上の管制レーダーから輸送機の機影が消失した——

第三章（後書き）

Wikipediaの

「装弾筒付翼安定徹甲弾」と

「5・56mm NATO弾」の項目を

参考にさせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5711p/>

HIMMEL -天国から見下ろした空-

2011年11月11日08時23分発行